

「知的障がい者の明日を考える議員連盟」
議員総会 議事録

【日 時】 2019年11月21日（木）16時00分～16時40分

【場 所】 衆議院第一議員会館 1階 第一面談室

【出席者】 別紙・出席者名簿参照

【議事録】 以下、敬称略

○参議院議員 三原じゅん子

それでは皆様、定刻前でございますが、野田毅先生が次の日程がございますので、一言だけご挨拶を頂いてから開会をさせていただきたいと思っております。

どうぞよろしくお願い致します。

○衆議院議員 野田毅

皆様ご苦勞様でございます。

知的障がい者の明日を考える会、議員連盟、今日は新たに会長が決まるということで、楽しみにしております。

必要な予算をはじめ、施策の推進については、続いてしっかりと私も責任を持ってお手伝いをさせていただきたいと思っております。

○参議院議員 三原じゅん子

ありがとうございました。

それでは、定刻となりましたので、始めさせて頂きたいと思っております。

知的障がい者の明日を考える議員連盟、本日の議員総会でございますが、ご入会いただいております役員の先生方に加えまして、本議連と共に車の両輪として活動して参りました知的障がい者のお子さんを持つ保護者の皆さん、福祉現場の方々にもご出席を頂いておりますので、よろしくお願い申し上げます。

その為、本日は議員総会との名称ではございますけれども、実質的にはですね、議員連盟勉強会を併せた「役員会」としての開催とさせていただきたいと存じますが、皆様よろしいでございましょうか。

(拍手 承認)

ありがとうございます。

それではまずはご挨拶の前、新規役員の選任を致したいと思っております。

実は今年の7月に行われました、参議院選挙の結果を踏まえまして新規役員
の選任ということが必要となって参りました。

政府の方にお入りになられた方々もいらっしゃったりとか、様々な事情がご
ざいますので、私共の総意と致しまして、是非、新会長として、野田聖子先生を
ご推薦させて頂きたいと思うんですが、皆様よろしいでしょうか。

(拍手 承認)

ありがとうございます。

それでは、ここで新会長に選任されました、野田聖子先生に一言、ご挨拶を頂
戴したく存じます。

野田会長、どうぞよろしくお願い致します。

(拍手)

○衆議院議員 野田聖子

皆さん、改めましてこんにちは。

今日は、大変お忙しい中、この議員連盟の総会で、私を新しい会長に推挙して
いただきまして、誠にありがとうございます。

一言って三原さん仰ったけれども、二言でも三言でも四言でも言いたいぐら
い色んな想いが溜っていて、私とすれば正直、こういう知的障がい関係の会に
入ることも実はためらっていました。

私は、九年前に息子を授かってから知的障がい児の母親になりました。だから、
皆様方からすると私はまだ新参者だし、まだまだ勉強不足な所も沢山あります。

また、私自身も自分の息子を育てるのに精一杯で、議員連盟の役に付いて多く
の皆様をお支えするようなそういうパワーがあるかどうか、非常に不透明な
んですけれども、木村先生が残念ながら今回議席を失ったということもあって、
でもやはり今この会でやらなければならない事が山積みでもあり、当事者とし
てしっかりと、物を申さなければならないということでお話を頂きました。

しっかり取り組んでいければいいなと思っています。

実は私は昨日も宮路拓馬さんのご案内で、鹿児島島の重度の障がい児との会合
にも出てきました。先週は大阪の豊中市という所に行きまして、重度の障がい児
も普通の小学校で学んでいるというところも学ばさせていただきました。

最近1週間に1回は障がいに関わる人達との出会いが頻繁にある訳で、これ
は私が障がい児の母だから呼ばれているのかなあっていう思いもあったんです。

けれども、そうではなくて、やはり、客観的に見てもこの国はどんどん人口が減っている中、どんどん障がい、または、生活に不自由な人たちが激増しているって言い方は、大袈裟かもしれないけれども、沢山増えているということがあるからなんだと思います。

障がいも様々な区分に無理やり分けられていて、一番古いのは身体障がいなんだと思いますし、知的障がいという区分ができて、精神障がいという区分ができて、更に私が議員になってから携わったのには発達障がい、自閉症っていうのがあります。

最近では、うちの息子のような医療的ケアが必要な子供たちも障がい児の仲間入りをしたところでございます。その人たちの総数を併せれば、相当な数に上っています。

もう一つ、忘れてはならないのは、障がいを抱えた子供たちというのは、1人じゃないんですね。障がいを抱えた方には家族があって、家族も当事者なんです。

家族がいなければ、彼らは、生きていくことができません。障がい児・者の制度は、(障がい児者) 個人のことばかりが突出するんだけど、実のところは家族があって、家族がなんらかの自己犠牲をして初めて障がい児者が活動できているんだってことを、どうもどっかですっぽ抜けているところがある。

私たちは(障がい児者を)嫌だと言っている訳じゃなくて、やはり、父も母もどんな形にしても生まれてきた子供たちは大好きだし、愛しているし、誰よりもこの子供たちの成長を見届けたいと思っています。けれどもやはり、人の力には限界があって、愛情があっても体力が続かない時にやはり様々な悲しい現実、事件、事故が起きたりもする訳です。

なおかつ最近では、親も高齢化、私も高齢者で生んじゃったので、とにかく親亡き後ってということがまったくこの国では見えてきません。

話は飛びますけど、今、日本国憲法の改正で皆さんが躍起になっているけれども、今、現在ある憲法の中の教育を定めた26条ですね。ここは、果たして履行されているかどうかっていうと、そうではない。障がいを抱えたがばかりに、この国は義務教育があってもどんな子でも学ぶ権利があると思ったけれども、現実には学ばせてもらってない厳しさに直面しています。けれども残念ながら憲法改正の議論の中に全くそんな話は出てきていません。

なぜかという、そういう子供を抱えている親は、子のケアに忙しくて、そういった発言をする所にもいけないんですね。それが置き去りにされているなか、その方や熱心に憲法改正をうたっていることに、私は非常に冷ややかな想いで国会議員として見守っている1人なんです。

今、やらなければならないことも、できてないことも正せないのに、全く違う事をやろうとしているのは、やっぱり国会議員としてはいかがなものかと。

そんな意味で議員連盟に参加している議員の皆様方には、心から首を垂れて、障害児者に対する取り組みに熱心に関わっていただいているということに敬意を評すると共に、新参者ですけれども私自身日々とてつもない障がい児と戦っている中で、皆のチームの一員として障がい者の幸せになることに関わっていきたいと思います。

やはり障がいってことだけにコミットするんじゃなくて、日本全体を見つめなおすという意味で割合としては、障がい児の出处がすごく関わっている。

今日は三ツ林先生もご出席されていますけど、MCU（中度治療室）がどんどん良くなっていることによって、幸いなことに本来であれば命を落とす子供たちが、障がいを抱えながらも人間として日本人として、自分の国で暮らすことができます。そして病院にいる間まではどうにか、人権が保たれている。けれども、一旦地域社会に出ると、その人権が吹っ飛ぶようなことも沢山あります。

できれば、こういうパラダイムシフトの中で、障がいというもののありようを見つめ直したい。2040年には高齢者の数がMAXになると言われているこの国にあって、高齢者が若いころになかったような、生活の不自由ってというのは、元々障がいを持っている人とリンクしていると思うんですね。だから、そういう意味で、「障がい」っていうとこれからの高齢者になる人々の中にも「障がい」っていうものがかかってくる訳です。

そうすると2040年には障がいを抱える人で溢れんばかりになるようなこの国の中で、私たちは、どうやって先進国として、あるべき国を目指していくのかっていうのを大胆な話だけれども、取り組んでいければいいと思っています。

（そういった取り組みの中で）まず私が気に入らないのは、現行制度は区分が多すぎて、どうもそれぞれを分断させているような気がする。

身体障がいの団体、知的障がいの団体、様々な団体がありますが、それぞれの親が抱えているのは「親亡き後」っていう共通点があるのに、なかなかまとまらないっていうジレンマがあります。

また、障がい自体も単純化できない。重複障がい者が凄く増えています。低体重児で生まれてくる子どもが日本は先進国の中で抜群に増えています。それは、MCUおかげもあるんだけど、その子たちは基本的には、重複の障がい児であることが多いです。

そういうところも踏まえて、障がいのあり方も様変わりする中で、この国のイノベーションと共に、昔ながらの流れに上書きしていく発想ではなくて、違う視

点をどんどんぶつけていきながら、私たち自身が障がいをもった1人として、当事者感覚でやってけるようになればいいなと思っています。

最後に、先日谷垣先生に会ってきました。

谷垣先生が仰ったのは、障がい者になってみて分かったことがいっぱいある。自分では一生懸命、障がい者の為に尽くしてきたつもりだし、予算もつけていたつもりだし、制度も作ったつもりだけれども、実際自分になると相当ずれているところがある。

皆さんが当事者になってくれるというのは無理だけど、せめてやはり「自立」って言葉はある程度できる障がい者の人だけ、「自立」って言葉すら言えない障がい児者は、その背景にもっともっといるっていう、その厳しい現実をこの議員連盟ではしっかり受け止めてくれる、そんな力強い活動ができたらいいなっていう風に母としても願っています。

ぜひとも先生方にも、そういう決して障がい者と関わることは綺麗事じゃなくて本当に親は生きるか死ぬかの本当に嫌だなと思うことが多い中で、運命を背負って生きているところを嫌がらずに聞いていただきたい。そして、万が一自分が当事者だったときに安心して暮らせるような、保険をかけるつもりで、私たちのややもすると我儘に聞こえるような発言も受け止めていただけたら、有難いなと願っています。

今「ワンチーム」って流行っているんですけど、障がい者に対してはワンではなく、「家族でワンチーム」としてやってきたことをどうもこの国はすっぽ抜けていて、「個人の自立」だけが強調され、家族がいて初めて成り立っている前提がすっ飛ばされている気がしてなりません。

そのワンチームの仲間たちが一番懸念しているのは、チームの一員である我々親が欠落したときに、(障がいを抱えた)彼らが本当に社会に出てきて生きていけるのかどうか全く見えてきていない現状なんだということを改めて皆さんにお伝え申し上げて、1つでも2つでも先生たちの力を頂いて改善できるように願っています。

拙い挨拶になりましたけれども、一生懸命頑張っていきたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

○参議院議員 三原じゅん子

ありがとうございました。

先生に新会長を引き受けていただいて本当に良かったなと、今皆様方が思った気持ちが本音ではないかなと思っています。

その他の会員の皆様の役職につきましてはですね。この後新会長とご相談させていただいて、皆様にご提示させていただきたいと思いますがそれで一任ということによろしいでしょうか。

(拍手 承認)

ありがとうございます。

続きまして、本議連の特色と致しまして、知的障がい者の方々の親亡き後の終の棲家、そして親亡き後の1人で安心して生活できる場所の確保といった現実的に差し迫った問題の解決を主軸におきまして、福祉現場の皆さんの声というものを「直接」聞いて、議員と現場の方々が「一緒に考えて」解決していくこの点にあるのかなという風に思っております。

そういう意味で常々、本来でしたら議員連盟というのは、議員の先生方たちだけで会議をするという形が多いんですが、私共の議連と致しましては、常に親御さんであったり施設で働いていらっしゃる皆様方と共に勉強会も一緒にセットとして行っていくという特色がございますので、これからもそういった事を続けさせて頂きたいという風に思っております。

このような議連の特色を踏まえましてですね。本日は、本議員連盟と共に車の両輪として活動していただいている福祉施設の代表者の方々、そしてまた、障碍者のお子さんを持つ保護者の方々にも出席頂いております。

それでは、福祉現場の皆様の代表といたしまして、障がい者福祉研究所代表の足高先生に一言ご挨拶をお願いしたいと思いますが、宜しくお願い致します。

(拍手)

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

野田先生ありがとうございます。

本当に会長にご就任していただきましてホッとしておりますし、三原先生も引き続き宜しくお願い致します。

○参議院議員 三原じゅん子

宜しくお願い致します。

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

「明日を考える」という事で私共が言い出したわけですが、今のままでいくと野田先生がほんとにご説明いただいたように明日って真っ黒けですわ。

本当に家族に地獄見ろというようなシステム構築しておいて、それで家族に努力しろと。

私の施設も奈良でスタートしましたが、まだスタートして20年しか経っていません。業界でいえばえらい新参門、そんな扱いです。

けれども施設をはじめて親御さんに会って思うのって、私には幸か不幸か子供って一人しかいてなくて障がい者でも何でもないけども、見ていて80歳、90歳のおばあちゃんが、50歳60歳の暴れる障がい者を抱えて生活している。それで旦那も介護保険の何級持っていて……。それで、行政からどんな手助けあんねん言うたって、週に2回、3回ヘルパーきますわ、デイサービスにちょろっと行けますわいうて……。それで生きていけって言うの？地獄やと思う。

障がい者の場合、野田先生がやっぱりおっしゃった判定区分でチェックされるわけですよ。その審査会っていうのには私も参加していたけれども、出てくるデータを見て「これ、どないして家の中で暮らせるの？」って思うようなケースがありすぎる。

色々な理想論はいい。理想論はいいけど、理想論より手前に少なくとも今障がい者って言われている子らが、家族が生きてけるようにだけしたったらいい。それ以上の話は、個々の家庭の状況、あるいは、周り周辺色々な環境があるからその中で、盛り上げんねやったら盛り上げたらいい。

でも、少なくとも安全に生きてける環境だけは作る。

私が野田先生に惚れ込んだのが、こないだ議員連盟・勉強会に来ていただいたときに「自分が死ぬとき、逝くときに、子供を殺してでも…」っていう風なことをおっしゃった。あのセリフが本当に、親御さん皆さんが言っはるセリフです。

今のシステムで言うと、入所施設で預かったって、障がい者年金を貰っても、自己負担など色々出費がある。そうすると月額一般的に言えば、2万円～3万円、足らんよ。今グループホームとかで暮らしていたらもっと足らんやろ。

※補足

入所施設の場合、不足する利用料や生活費に対する補足給付が行政からなされる。他方で、グループホームの場合は補足給付が無いので、保護者が追加負担することになる。

うちの施設の運営で、多少でも自慢できるのは、減免措置をして障がい者年金以上の負担部分をチャラにしている。だから生きていけんねんけど。

そうでなかったら月2万円でも3万円でもお母ちゃん死んだ後に誰払うの？

そういうようなシステム構造は酷いと思うし、そこを何とかできるのであれ

ば、理想論ではなく芸術活動とか創作活動をやめてもいいとも思う。

お金がないなら無いなりのサービスになるけれども、でも、生きていける場所だけは最低確保したったらどうやと思うのが本音です。

今、野田先生もおっしゃっていましたが、知的障がい者の人口数は国際基準ベースで推定されると日本では270、280万人いることになる。

私らが問題提起をしだしたころは、知的障がい者の数、70万人言われていました。国って恐ろしいもので、あつと言う間に110万人ぐらいに増やしました。まだこれから増えてくるんやろうと思います。

それと元々「3障がい」という言い方ですけども、知的障がい、精神障がい、身体障がい、それぞれが被っている重複している人がいっぱいいます。特に、精神障がいと知的障がいの場合、大多数は重複しています。けれどもマスコミも国も、論点を構築しやすい身体障がいをベースにしていくから、今の様な不都合が生じている。

私、先生にこれから頑張ってお願ひしたいのは結局ワンイシューでして、「障がい児者が安心して生活していけるシステム」です。

それを入居施設と呼ぼうが、グループホームと呼ぼうが、なんと呼ぼうがどうでもいい。新しいケアシステムでも何でもいいですからそれ作ってもらいたい。それをきっちり構築してもらいたい。

それも、私、高い理想というのはそれ程無いですから、障がい児者が最低限親亡き後もとりあえず生きてけるように。

先生方、お世話かけますけれども宜しくお願ひ致します。

○参議院議員 三原じゅん子

ありがとうございました。

足高理事長にお話をいただきました。

これまで本議員連盟では本日お配りを致しました参考資料、ご覧になっていただきたいと思います。議連の最終目標。長期的課題を「親亡き後の終の棲家」としたうえで、その問題を解決するうえで、生じてくる中期的、短期的な課題も併せて解決を図ろうとしてまいりました。

次回以降の議員連盟の開催に関しましては、これまでの議論などもまとめてまいりました問題点、あとは議題について、野田新会長のお考えも含めてですね、新たに解決すべき問題点を、洗い出していくということも必要ではないかとに思っております。

更にですね、本議員連盟も、野田新会長の基で、新しい体制となりましたので、新たな入会者を募った上で、できましたら親族ですとか、そういうところで実際

にそういった障がいを持っている方と接したことがある、そういった先生方にもご入会をいただいて、次回以降の議員連盟の開催というものを考えていく。

これも新会長にお任せしながら、皆様と共に考えていく会にいたしたいと思っておりますが、いかがでしょうか？

(拍手 承認)

○参議院議員 三原じゅん子

今までの、議員連盟という形とは少し異なってくるかもしれませんが、より一層「現場を知っている方による議員連盟」という形を第一に目標として、そして一つずつ私たちは前へ進めていく。

先ほど、野田新会長からもお話がありましたが、社会が変わっていつている。そして人口も変わっていつている。様々なことが変わっていく中で、私たちがこれからどう子供たちを守っていくのかということをしつかりと考えたうえで私たちも進めさせていただかなければならないと思っております。

今後とも是非忌憚りの無い活発なご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いを申し上げたいと思います。

(拍手)

○参議院議員 三原じゅん子

それでは、今日お越しの先生方に、もしよろしければ一言ずつご挨拶をいただければ、ありがたいなという風に思います。

では三ツ林先生から宜しくお願ひ致します。

○衆議院議員 三ツ林 裕巳

埼玉14区の三ツ林裕巳と申します。

私、職業は医師でありますけれども、今日この会が発足するという事、三原先生から伺いまして、野田会長のこの思い、それをしっかりと私も受け止めていきたいと思ひます。

それと足高先生のこれまでのご努力、そしてやはりワンイシュー。この一つのことをしっかりと成し遂げる。これは政治の役目だと思ひますし、是非ほんとにこの今日おいでの皆さんが安心してお子さんを育てられる環境、そしてまた、日本がそういう社会ではなくてはならないということをしつかりと思ひました。

しっかりと私も議員連盟の一人として頑張ってまいりたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

○参議院議員 三原じゅん子
ありがとうございます。

○衆議院議員 青山 周平
みなさんこんにちは。

愛知県の衆議院議員の青山周平と申します。

野田新会長のもと、しっかりとこの問題に立ち向かっていきたいと思っております。

一番初めに足高さんの施設含め、東京や千葉の施設へ現地視察に行かせていただいたことがご縁でございました。

議連がこのような形でしっかりとリスタートと言いますか、再開をしていくということが大変ありがたいと思っておりますし、出来ることは微力ですがしっかりやっていきたいと思っております。

お誘いいただいた理由も、先ほどの話とはちょっと違うんですが、私はおばさんが障がいを持った方で、ずっと同居してきました。

幸いにも、家族がいましたので家族で…「いました」というか、まだ「いる」んですが。家族が9人家族なんです。おばさん、父、母、僕、妻、子供4人というほんとうにごった返したような家で今でも住んでおります。

そういう環境の中でほんとうに、私は本当に恵まれているなという風に思いません。今は妻が面倒を見ながら、というところではありますが、いろんな形があって、いろんな家族があって、うちは自営業でしたし、恵まれているところは多くあったなということを感じながらも、何とか障がいをもった方々のために、力を尽くしてまいりたいと思っておりますので、どうかこれからもご指導賜りますように宜しくお願い致します。

○参議院議員 三原じゅん子
続いて、宜しくお願い致します。

○衆議院議員 左藤章
大阪の左藤章と申します。

今来たんで、ちょっとわからないんですけども、ただ足高さんは昔から存じ上げている方で、私の所でも施設をやっていまして私が理事をして従妹は理事長しています。

この障がい者の施設をですね、色々な障害がありますけれども知的障がい者のお子さんも抱えながら授産施設とか様々な取り組みを行っています。

しっかりケアをしながら、また社会的にもっと皆がオープンに受け入れられるように、特に子供たちのことも学校の問題がありますのでそれもやっぱり理解がないとなかなか現場も動きません。

やっぱりせつかく生まれてきた命でございますので、しっかり人生全うできるように、そういうのが我々の使命だと思っておりますので頑張っていきたいと思えます。

○参議院議員 三原じゅん子

安藤先生、よろしく願いいたします。

○衆議院議員 安藤高夫

私、東京ブロックの安藤と申します。

私も三ツ林先生の後輩で一緒なんですけども、出来の悪いやぶ医者なんで……。

ちょうど私も病院をやってまして、医院長の息子さんが知的障がい者なんです。その子のことは小さい時から知っているんですけども、やはり、仕事を持ちながら知的障がい者のケアと聞くと家庭をどうしたらいいのか。非常に大変な問題になります。その子のお母さんも歯科医師なんですけども、電話しても、電話口で大きな声で話さないと聞こえないのかして大変な状況なんです。

その医院長はそうでありながらも、これから共生社会を作るためには、どんなサービスを作っていけばいいのか、どういう組み合わせでやればいいのかということを非常に研究しているので、もしなんかの機会があればお話しをさせていただければ、これも一つの解決の糸口になるかもしれないと思っております。

またそういった機会がありましたら、是非お話しさせていただければと思えます。ありがとうございます

○参議院議員 三原じゅん子

どうもありがとうございました。

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

先日の木村先生の選挙、残念な結果でしたけれども、(勉強会のメンバーを)誉めてやっていただきたいのは、うちの勉強会のメンバーの施設さん、それからもちろん親御さんたちが在住するエリアで得票数の数字を集計させていただきましたら、木村義雄さんの票が2万表程度そこで増えておりました。

あれだけの期間で、まだメンバーも集まってない中でようやくくれたと私は思っています。

○参議院議員 三原じゅん子

私も全国比例だったので、どれだけ大きいことかよくわかります。

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

褒めたってください。

(拍手)

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

(出席法人、保護者らに対して) また頑張ろうな。3年後やけど…。

○大川興業 総裁 大川豊

あと一点だけお願いします。

2020年に実は知的障がい者の方のスペシャルオリンピックというものがあるんですよ。それがですね、まったく誰も知らないっていう状況なんです。

冬季オリンピックが実は北海道であります。

私も過去にはさりげなく平昌のパラリンピック行っただけなんですけど、バイアスロンで観客が私一人しかいないということが実はありました。寒いのでみんな帰られたんですね。なので、私一人だけがバイアスロンを観戦することになった。

ですから日本だけでなく、フランス頑張れ、ロシア頑張れという全世界を応援したということがございまして、スペシャルオリンピックはまだメディアでは全く取り上げられない状況があるので、是非とも皆様のお力を貸していただきたいということがあります。

○衆議院議員 野田聖子

たしか(スペシャルオリンピックに関する)議連では、馳さんが窓口になっていたと思います。

障がい者スポーツの議員連盟があるので、私はパラなんですけど、多分馳さんのところだと思うので、また言っておきます。

○大川興業 総裁 大川豊

是非、お願いさせていただければと思います。

○衆議院議員 三ツ林 裕巳

先月埼玉でもスペシャルオリンピックの大会があつて、僕も挨拶ちょっとさ

せていただいて…。

○衆議院議員 野田聖子

案外、情報が入ってこないよね。

○大川興業 総裁 大川豊

だと思います。

なので、自分が現場に行って伝えていければと思っています。

○衆議院議員 三ツ林 裕巳

(スペシャルオリンピックは) 存在するっていう話しかきかない…。

○衆議院議員 野田聖子

そう、そうなのよ。

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

前のオリンピックの時は細川総理の奥様と近衛さんが一生懸命熱入れてやられていました。

今から2回、3回ぐらい前の勉強会の時に、厚生省のお兄ちゃん(※内山企画課長)に世間ではオリンピック、オリンピックって言っているけど、スペシャルオリンピックどうやと聞いたら、「僕たち知りません」っていう答えがあったんです。

○保護者 竹内桂子

私の甥っ子の智子ちゃんが水泳の方で、まだ名前がスペシャルオリンピックって決まなくて、ゆうあいピック(※全国知的障害者スポーツ大会の愛称)の一環で行うことが全国大会があったんですね。

それがもとというか、一番最初なんですよ。それで、うちの娘が水泳の東京代表でいったんです。

○参議院議員 三原じゅん子

そうでしたか。

○衆議院議員 野田聖子

どんどん事務局の方でね、いろんな情報を出してもらっていきましょう。

○参議院議員 三原じゅん子

どんどん発信していきましょう。

○障がい者福祉研究所 代表 足高慶宣

さっきの話と一緒に、パラリンピックやと形で見えるんですよ。

でもスペシャルオリンピックスの場合、知的障がいになると形がわかりにくい。そういうのってすごくメディアの取り上げ方が全然変わってしまいます。

それと、(過去の議連の時) その時に言いましたけど、日本人のチームと、アメリカ人、他のヨーロッパのチームと一緒に見たときに、日本人チームは一目瞭然で(知的障がい者と)わかるけど、アメリカ人とか向こうやと知的障がい者の幅が広いから健常者とあまり変わらない人が出ていたんですね。

そういうところも、(映像で取り上げられると) 政府が嫌がるのかなということもあるのかなと思います。

○参議院議員 三原じゅん子

ちょっと調べて、きちっと、必ず責任もって調べさせていただきます。

いい情報をありがとうございました。

じゃ、今日はこれぐらいでよろしいでしょうか?最後に一言よろしいでしょうか。

○保護者 柴崎久美子

足高理事長のいらっしゃる施設の者で保護者会の会長をさせていただきます柴崎です。

野田先生が今回会長になるって言うお話を伺って、すごく私嬉しくて……。今日も(議員総会が始まる前に) お話しして、本当に私たちが言いたかったことを全部言ってくれたんです。本当に頼りになる…親の意見ってなかなか外に出て行かないので。

やっぱり自分自身の生活していくのにも大変で、足高理事長のところに行って、私たちはまだ救われています。けれども他の施設で。もちろんこちらにいらっしゃる施設の方々は立派な方々なんですけど、施設によっては苦しめられて親が、親が頑張れって言われちゃう……。

そういう押し付けではなく、本当に私達親の為にいろいろ動いてくださって、私たちがこれから先、言いたいことをいっぱい聞いていただきたい。施設をみられるだけじゃなく、私とも一緒に話をさせていただける会場だと思っています。

これから私たちの子供の幸せの為だけでなく、私たち家族の為にも、先ほど家族がいて救われたというお話がありましたけど、ひとり親だったりもうほん

とに年老いて70歳、80歳のお母さん達がいるわけですよ。

お婆さんとかお父さんとか。片親だけだと、やっぱり言ってみたくても言えないという状態で苦しんでいる人たちが一杯いるので、その人たちの為にもこれから頑張っていたきたいので…。

○衆議院議員 野田聖子
泣かないで。

○保護者 柴崎久美子
宜しくお願いします。

(拍手)

○参議院議員 三原じゅん子
では、今日の議員総会はこれにて終わりとします。ありがとうございました。

(議員総会 終了)